

Title	島谷先生を偲ぶ
Sub Title	
Author	竹中, 正明(Takenaka, Masaaki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1978
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.51, No.2 (1978. 2) ,p.119- 121
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	島谷英郎先生追悼記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19780215-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

島谷先生を偲ぶ

竹中 正明

「島谷先生」と改まつてお呼びするよりも「島谷さん」と申し上げた方がよびびつたりする、これが学生時代から親しくご指導いただいた私共仲間内の抱いている先生のイメージである。その島谷さんも今はない。そう考えると言いようのない寂しさにおそわれ、人生の無情をしみじみと感じさせられる。

私が先生に初めてお目にかかったのは、塾が新制大学に切替わつた最初の年（昭和二四年）で、この年私は旧制の予科を終えて法学部法律学科三年に進学した。当時は現在のゼミに当る研究指導という科目があり、全員がこれに分れて参加することになつていた。そして最初にご指導いただいたのが島谷先生であり、これがご縁で爾後公私にわたり親しくお付き合いさせていただくこととなつたのである。

私が先生のお目に止つたのは、後で知らされたことだが、或る日国電が事故で遅れ、私がかかり遅れて教室に入つた時のことだつたそうである。私はそのまま教壇に進んで先生に遅延証

明書を提出して理由を述べ諒承を求めたようである。それが大変正義に見えたようで、それ以来何かと気にかけていただくようになった。これは後に先生が私の結婚披露宴で紹介されたことであるが、大変嬉しく、私としても忘れることの出来ないエピソードである。先生は大変義理堅い方で、昭和二八年に欧州に留学された折、東京駅にお見送りの私共に帰国後当時としては珍らしいシツクの安全剃刃を一人々々プレゼントされた。こうしたお人柄から、私の行動がお気に召したのではないかと思う。

大学教授には研究者としての生活と、教育者としての生活の両面があるといわれるが、前者の業績としてはご専門の分野で主著「海商法・保険法」（評論社）の他多数の著書論文があることは改めて申し上げるまでもない。ただ私は自ら先生の弟子をもつて任じながら今日まで直接専門分野でご指導いただいた機会は比較的少い。

しかし、もう一つの教育者としての面での接触では、全人格的なご指導を頂戴することができ、大変幸せに思つている。私の今日あるのは全て先生のお陰と申しても決して誇張ではない。大学院生時代、経済的に恵まれない学生の一人であつた私にアルバイトとしての家庭教師の仕事を紹介して下さいました。先生であつたし、二年の修学年限を終えるに当たり、就職すべ

きか学校に残るべきかの岐路に迷った時、就職しても学問を続ける途はあることを論され、就職先のあつせんまでして下さったのも先生であつた。

それも単なる紹介状に止まらず、わざわざ会社まで同道され、先方の担当役員に面会してご紹介下さるという実に情のこもつた方法で、すでに締切のすぎている現在の勤務先の試験を受ける機会を与えて下さつたのである。幸い入社することができ、ご好意に報いることができた。その後主として調査部門を歩き、先生のいわれた社会へ出てからの学問の途を進むことができたのは、誠に幸せだつたと思つている。

恐らく、このような形で先生のお陰を蒙つた者は先輩後輩を通じて数多いに違いない。私達の研究指導を皮切りに始まつた島谷ゼミの現役・OBによる例会は、先生のご存命中ご健康な間は毎年開かれていたが、何時も大勢の参会者があつて賑やかであつた。特に感激したのは、先生が昭和初年の助手時代に予科の教員を兼ねておられた頃に担任されたクラスの卒業生の方々が合流を申出られ、合同で会を開いた時のことである。とかく卒業すればとうくなりがちな師弟の關係が、遠い昔の子科時代からこれ程長く保たれてきたことに驚くとともに、これ程までに敬愛されている先生のご人徳に改めて感じ入つた次第である。

先生は通俗的な言い方をすれば、いわゆる面倒見の良い方であつた。頼まれれば嫌とは言えないご性格で、昭和三年から長年就職部長として塾生の就職に尽力された。この間全国津々浦々を回られたことも再々であつたとかがう。こうした面倒見の良さが、今にして思えば先生のご健康を蝕み、お命を縮めたのではなかつただろうか。先生のお人柄は相手先企業でも高く評価されていた。私の奉職する会社でも、かつて人事担当役員であつた塾の先輩が、先生が就職部長になられてからは話が円満に運び良い人材を得られたと折に触れて語つており、此度の先生の訃報に際しては、恐らく先生はお忘れかも知れないが何を差し置いても葬儀には参列したいと連絡して来られた程である。

先生とは長い間のお付き合いであつたが、その間常に温和で端正な、そしてハンサムなお顔に何時も笑みをたたえておられ、怒つたお顔を一度も拝見しことがなかつた。その先生に最後にお目に掛つたのは、おなくなりになる数日前の雨の降る寒い夜であつた。先生のご容態が急変したとの高島先生からのご連絡で、退社後入院されていた川崎市の井田病院に駆け付けたが、先生はすでに昏睡状態で酸素マスクを付けて特別室に入つておられた。付き添つておられた奥様もお帰りになつた後で、看護婦の許しを得てただ一人入室し先生と対面したが、病魔と

である。

の戦いでかなりやつれられたとはいえ、そこにあるのは昔のままの温和な先生の寝顔であつた。声をかければ反応されるともうかがつていたが、私には先生が良くお休みになつておられるとしか思はず、声をおかけするのとはばかられ、しばらくお顔を拝見するだけに止めさせていた。

人工透析のゴム管が痛々しい腕を時折動かされる他は静かで、苦痛など感じられないようなご様子にも見えた。看護婦に尋ねたところ、一時は心配したが、現在は小康を得ており、しばらくは急な変化もないだろうとの答えだつたので、再度お訪ねするつもりで辞去したのだが、それがついに先生との最後になつてしまつた。もつとお元気な内になぜお訪ねしなかつたかと悔まれてならない。

お通夜には仕事の都合でどうしても参上できなかったので、特にお許しを得て密葬の日に日吉のお宅に伺い、祭壇に飾られた先生の遺影に對面したが、在りし日の事々が想い出されて胸が詰る思ひであつた。

葬儀の日、祐天寺を訪れる人々は引きも切らず、今更ながら先生のご遺徳の大きさが偲ばれた。先生の播かれた種はこれら多くの人々によつて受け継がれ、大きく育つて行くであろうことを信じて疑わない。

先生が安らかに眠られんことを心からお祈り申し上げる次第